川　床　靖　子（かわとこ　やすこ）

学位の種類　博士（教育学）

学位記番号　教第83号

学位授与年月日　平成9年12月10日

学位授与の要件　学位規則第4条第2項目核当

学位論文題目　実践に埋め込まれた認知と学習の研究
－道具と行為のコンテキストの相互的形成－

論文審査委員　（主査）
教授　宇野　忍　　教授　菊池武剋
教授　長谷川啓三
助教授　本郷一夫

論文審査の要旨

1.論文の構成は次の通りである。

序論

第1部「状況に埋め込まれた学習」

第2部「状況に埋め込まれたリタラシー」

第3部「状況に埋め込まれた表現」

結論

2.本論文の内容は次の通りである。

序論においては，これまでの認知研究から状況的認知研究までの歴史的変遷が述べられ，その中において本研究の目的，理論的枠組み，方法論が明らかにされている。すなわち，1）本論文では，状況やコンテキストを，そこに参加する人々が能動的に組織化する実践そのもの，すなわち状況やコンテキストを作り出すことと認知的行為を組織化することとは一方が他方の規定要因であるといった関係ではなく，むしろ，互いが互いを形成し合うものとする状況的認知理論に基づき，「認知や学習は，人々が様々な道具を積極的に利用し，アレンジし，状況を作り出しなが

ら，認知的行為として組織化するものである」と考えること，また2）本研究の目的はそのような考えの妥当性をデータを収集し検討することであること，さらに3）仕事場における日常的な学習活動や認識活動における道具のアレンジやコンテキストの組織化の実態を明らかにするための方法として，観察とインタビューによるエスノグラフィックな方法，ビデオ分析によるエスノメソドロジー的方法を採用することが述べられている。

第1部「状況に埋め込まれた学習」では，重さ，図形，数，計算をテーマに，タンザニアと日本の小学生による授業場面における課題解決の様子を比較検討し，それぞれの学校で実際に何が学習されているのかが，従来の実験的手法に基づいて明らかにされた。すなわち，調査結果から，1）どんな学習でも学習内容だけの学習ではなく，常に，学習内容が意味をなすコンテキストの学習を伴うものであること，また，2）コンテキストの学習と既成のコンテキストを学習者が一方的に学ぶということではなく，そこに参加するメンバーが新しいコンテキストや言語ゲームを共同で作り上げる実践に参加することであること，が示された。

第2部「状況に埋め込まれたリタラシー」では，ネパールの農村共同体における社会的ルールやルールブックに関するリタラシー実践，同じくネパールの野菜栽培と土地利用におけるリタラシー実践，そして日本の冷凍海産物の流通活動における様々な文書をめぐるリタラシー実践を取り上げ，ア）文書や社会的約束事，あるいは物品の空間配置といった道具が，リタラシー実践における特定の活動にどのように埋め込まれているのか，イ）それらの道具がどのように行為を組織化しているのかが，観察とインタビューによるエスノグラフィックな方法，ビデオ分析によるエスノメスノドロジー的方法を用いて明らかにされた。すなわち，いずれの実践でも，1）協同的に流通や生産を組織化する中で文書をはじめとする道具が組織化されること，2）一方で，そうした道具が協同的な活動の組織化を促進し，方向づける役割を果たしていることが示された。また，1）および2）から，道具の組織化と行為のコースやコンテキストの組織化は，相互形成的な関係にあることも示された。

第3部「状況に埋め込まれた表現」では，日本の幼児の描画活動と地図による活動を取りあげ，実験的手法を用いて，“見る”ことと“描く”ことの道具（表現の様式，方法）を用いた組織化のプロセスが明らかにされた。例えば，幼児への描画指導において，描画対象をまずいくつかの部分に分割し，次いで分割した各部を単純な幾何学的形状と類比させるという手だてが有効であることが示されたが，それは幼児がそのような方法ないしは道具を用いて知覚のフィールドを構成することができるようになり，対象とよく似た画を描くことができるようになったことを示していると考えられた。こうした結果を含む実験や調査結果から，1）対象を描く，表現するということは，単に対象を写し取るということではなく，対象を表現しやすいように加工しながら見て表現することであること，2）用いる道具によって，対象の知覚や観察が方向づけられ組織化

されることであることが示唆された。

結論では，一連の研究で明らかにされたこととして，1）教室や仕事場における概念やルールの学習，道具の使用はコンテキストに埋め込まれており，コンテキストやルール，概念は相互に相互を形成する関係にある．2）仕事をする，何かを表現するといった活動の中で，対象や環境の観察，理解は道具の併用によって組織化されている，3）見ること，知ること，理解することは，対象や環境をただ見たり解釈することで可能になるのではなく，道具を用いて環境を加工したり，環境を構造化することによって可能になるという3点が示され，次いで「認知，学習への状況論的アプローチの今後の課題」として，「拡張による学習」をいかに作り上げ，閉じられたネットワークとしての学校を変えていくかという具体的な課題が言及されている。

論文審査結果の要旨

近年，認知心理学的アプローチを採用した教育心理学研究の中に，日常生活場面における学習や認知を対象とする傾向が見受けられる。この傾向は，学校教育の中で学んだ知識が日常生活場面に活用されないという事実や学校場面の学習が学習者にとって意義を見いだせない活動になっているという事実などから，その対極にあって，学習者自ら積極的に学んでいる日常場面での教授学習過程を対象に，その共通特徴やメカニズムを明らかにしようとする研究が志向される結果といえる。また，こうした研究では，その理論的基礎として，「状況的認知理論」が採用されるのが常である。本論文で展開された一連の研究はこの線に沿うものであるが，新しい試みがなされている。その一つは，日常生活場面の学習・認知を研究する際に採用されていた「状況的認知理論」を学校教育場面にまで外挿してその妥当性を検討している点であり，他の一つは，日本文化の中の学習・認知だけでなく，他の文化圏のそれをも対象とした点である。すなわち，本論文は，学習や認知が行われる場を，学校場面－非学校場面と日本文化圏－非日本文化圏の2軸で4区分し，そこでの学習・認知を対象に，状況的認知理論から想定される共通のメカニズムが実際に機能しているかを明らかにしようとした研究である。

従来の教授学習過程ないし認知過程の心理学的研究では，本論文で展開されているような組織だった比較文化的な研究は希少であり，本研究の先進性は評価できる。また本論文は，「見ること，知ること，理解することは，対象や環境をただ見たり解釈することで可能になるのではなく，道具を用いて環境を加工したり，環境を構造化することによって可能になる」ことを実証するとともに，このことが日常的場面にも学校場面にも共通しているという事実を明らかにしている。この事実は，1）これまで学校場面の学習を否とし，ややもすると学校場面と対立的に行われて

きた日常的場面の研究が実は学校場面の研究とは剥離したものでないことを明らかにするとともに，論者も指摘するように，2）学校場面での学習を学校環境のデザインという観点から改善していくという教育実践への示唆を含んでいる。本論文は，以上のように，学習・認知研究の新たなあり方を示唆するとともに新たな教育実践を示唆する点において評価できる。

本論文には，採用した理論をさらに精緻なものに発展させるために理論から生起が予想しうる現像の吟味が必要である，本論文の用語ないしは記述概念の吟味が必要である，場や文化が異なっても共通の学習や認知のメカニズムが作用することを可能にしている学習者の前提条件，文化的制約の共通性などの分析がさらに行われる必要があるなどの問題点を指摘できるが，これらは不足面でもあるとともに今後の進展への期待でもある。

本論文は上述の不足面を持ちながらも，研究の先進性，学習・認知研究および教育実践への示唆など，見るべき点を有していると判断できる。

よって博士（教育学）の学位を授与することを適当と認める。